



千葉大学 工学部 都市環境システム学科

飯田 高大

現在の蒲田は、いろいろなものがありすぎてゴチャゴチャした街になってしまっている。そのため、「蒲田というと……」というように、「……」にはいる、だれもが共通して言える蒲田の名物や、ランドマーク的なものが存在しない。このまま、蒲蒲線が開通してしまうと、蒲田は羽田空港へ行く人々のただの通過駅になってしまう。これからの蒲田のさらなる発展と、蒲蒲線整備計画の成功のために、蒲田の名物の明白化及び、蒲田を一つにまとめるべく発展の起爆剤となるランドマークが絶対的に必要となる。

それ故に、この蒲田で「City Park Land」を計画する。蒲蒲線開通により、JR・東急蒲田駅の利用者が増えるのであるから、この人々に蒲田で楽しんでもらう計画である。



講 評

どの街（都市）でも交通網の変化・発達により（都市）の形態は常に変化して行く。新しく鉄道が通り発展するケース、単なる通過点となり衰退するケースなど様々だ。今回の計画は蒲田育ちの作者が、新しく開通が予定されている蒲蒲線により、東急池上線の東急蒲田-羽田間が新たに延進され、今までの終着駅が通過駅（しかも地下鉄）に変わることにより、蒲田が衰退してしまうのではないかという危機感から、本計画を提案している。計画のメニューは大きく分けて2つだ。

1つは、東急蒲田駅隣に「City Park Land」...複合商業施設を計画すること。そしてもう1つは、その屋上から蒲田中を走り抜けるジェットコースターを作ろうというものだ。なんと大胆な計画だろう。それは作者が一般の都市計画で俗に言う「箱もの」・「City Park Land」だけでは人々を集め都市に還元するにはあまりに力不足ということを知っているからだ。蒲田育ちの作者が肌で感じ計画したプランが、本計画「蒲田行進曲」であると私は理解した。

[審査員 大岩 義充]